

研究ノート

通信報国分団の実態と地域における役割

—初山別通信報国団の活動からの考察—

梅藤 夕美子

はじめに

通信報国団とは、産業報国運動のなかで設立された産業報国会⁽¹⁾の1つであり、大日本産業報国会の一翼を担った団体である。産業報国運動は日中戦争を契機として始まった労使一体となって日本精神を発揚するための運動⁽²⁾であり、1938（昭和13）年7月30日に中央機関である産業報国連盟が創立され⁽³⁾、各事業場には産業報国会が設置⁽⁴⁾されるようになった。1940（昭和15）年11月23日には大日本産業報国会が結成され⁽⁵⁾、各産業報国会はこの傘下に入り、「中央から地方、さらには各事業場の末端にまでいたる」⁽⁶⁾組織が整備されたのである。

通信報国団については、後藤康行による先駆的な研究⁽⁷⁾が既にある。それらの研究によると、1940年5月1日、通信従業員会連盟など通信内部にあった既存の職員組織の解散を経て、通信報国会が結成された。さらに、1941（昭和16）年4月20日、全通信職員が加盟する団体として通信報国会から改組して設立されたのが通信報国団である⁽⁸⁾。通信報国団は「大通信一家族主義」を基本理念としており⁽⁹⁾、各地の通信局などの支団とその下にある各地の郵便局などの分団から構成された組織であった⁽¹⁰⁾。

後藤は、郵政博物館が所蔵する通信報国団の機関誌である『大通信』⁽¹¹⁾や『通信公報』などを主な史料として、設立の経緯、組織構成、基本理念、錬成事業や奉仕事業などの活動内容、さらには、『大通信』掲載の文芸作品から団員の意識を明らかにしている⁽¹²⁾。これらの研究に

- 1 産業報国運動と産業報国会についての基本的知識については、芳井幸子「産業報国会」木坂順一郎編『体系・日本現代史』第3巻、日本ファシズムの確立と崩壊、日本評論社、1979年、及び、神田文人「解説」神田文人編『資料日本現代史』第7巻、産業報国運動、大月書店、1981年を参照。また、榎一江「産業報国会研究の可能性」法政大学大原社会問題研究所『大原社会問題研究所雑誌』第664巻、2014年に研究動向がまとめられている。
- 2 産業報国連盟「産業報国運動とは何ぞや」神田、前掲書、55頁。
- 3 同「産業報国連盟創立趣意書／綱領／規約／役員」同上、42頁。
- 4 厚生省労働局「産業報国運動要綱」、同上、117頁。
- 5 厚生省労働局長「大日本産業報国会ノ創立二関スル件」同上、225頁。
- 6 神田、前掲、601頁。
- 7 後藤康行「戦時下の通信職員組織・通信報国団に関する基礎的研究」郵政歴史文化研究会編『郵政博物館 研究紀要』第5号、公益財団法人通信文化協会博物館部（郵政博物館資料センター）、2014年。同「九州における通信報国団—熊本支団の研究—」『郵政博物館 研究紀要』第7号、2016年。同「文芸作品にみる通信報国団員の戦時意識—和歌・俳句・川柳の分析—」『郵政博物館 研究紀要』第11号、2020年。同「通信報国団の活動にみる錬成と奉仕」『郵政博物館 研究紀要』第13号、2022年。
- 8 後藤、前掲論文、2014年、34～36頁。
- 9 同上、37～38頁。
- 10 同上、36～37頁。
- 11 『大通信』の概要については、後藤康行「戦時下の漫画にみる通信事業と戦争—郵政資料館所蔵雑誌『通信の知識』および『大通信』掲載漫画の研究—」郵政歴史文化研究会編『郵政資料館 研究紀要』第3号、日本郵政株式会社 郵政資料館、2012年、87、93～94頁を参照。

よって全国規模での活動は明らかになりつつあるが、支団・分団に関しては郵政博物館に資料が不足しているという史的制約によって、あまりわかっていない。後藤は、郵政博物館にある熊本支団の資料から、熊本支団の組織構成と活動概要を明らかにした⁽¹³⁾が、分団に関しては支団資料から読み取れる活動のみで⁽¹⁴⁾、組織の末端である分団の実態解明には未だ不十分な状況にある。郵便局は地域社会にとって身近で必要不可欠な存在であるために、後藤も指摘している通り⁽¹⁵⁾、分団の実態を解明することによって戦時期の地域社会における通信報国団の役割を考察することができるだろう。そのためには、新たな資料からのアプローチが必要である。

そこで、本稿では、^{しよさんべつ}初山別通信報国団が発行していた慰問通信『かもめの便り』を分析することで、一郵便局における具体的な通信報国団の活動実態や組織的性格、地域社会との関わりを探る。

1 主な史料『かもめの便り』について

(1) 基本情報

『かもめの便り』⁽¹⁶⁾は、1937（昭和12）年12月から1945（昭和20）年8月まで、初山別郵便局共助会及び初山別通信報国団が郷土出身の兵士に向けて発行していた月刊の慰問通信⁽¹⁷⁾である。B4版片面1枚が基本で、「天候（気候／四季）」・「景気」・「銃後（銃後の御家庭）」・「人の出入（人の動き）」・「慶弔」・「村の行事（村の展望）」・「村の話」・「ポスト（郵便函／私書函）」・「特信（電波）」⁽¹⁸⁾などの事項によって縦に紙面が区切られ⁽¹⁹⁾、記事やイラストが掲載された。名前は鳥のかもめに由来する。かもめは、春に鯨の群衆が現れるとその上に集まる、鯨の到来を告げる鳥であった。

記事は、紙面の各事項の担当となった郵便局員が、村内の出来事取材して執筆した。1938年9月の10号までは手書きであり、以降は謄写版印刷で作成された。おおよその編集スケジュールは、毎月3日に全局員が出席する編集会議が行われ、5日が原稿執筆の締め切りであった。謄写版印刷が変わってからは、局長が最終編集割付けとガリ切りを行い、6日に印刷した。1938年3月の4号以降は、盧溝橋事件（1937年7月7日）を記念して、毎月7日に発行された。発行部数は、初期には10部だったのが最終的には100部を超えるようになり、最終号では250部に達した⁽²⁰⁾。

12 後藤、前掲論文、2014年、2020年、2022年。

13 後藤、前掲論文、2016年。

14 同上、66～69頁。

15 後藤、前掲論文、2014年、46頁。

16 『かもめの便り』の表記は、ひらがな、カタカナ、漢字と様々なバリエーションがある。後述する『かもめの便り』全号が綴られている冊子の表紙には『かもめの便り』とあり、先行研究においても『かもめの便り』と表記していることから、本稿でも『かもめの便り』という表記に統一した。

17 「慰問通信」という用語とその定義については、梅藤夕美子「『かもめの便り』から『はと』へ—北海道初山別村の慰問通信にみる銃後の意識—」二十世紀研究編集委員会『二十世紀研究』第22号、2021年、100頁を参照。

18 () 内は表記揺れ。

19 紙面構成の変遷については、梅藤、前掲論文、128～129頁の図を参照。

20 初山別通信報国団『かもめの便り』第85号、昭和19年11月7日。初山別村編『かもめの便り』史料篇、北海道出版企画センター、2000年、189頁。柳本繁解題「『かもめの便り』 戦時期初山別郵便局より前線兵士への郷土通信」1、北海道史研究会『北海道史研究』第25号、1981年、35頁。鈴木トミエ『かもめの便り』証言篇 初山別村発一戦地の兵士へ、北海道出版企画センター、2000年、11頁。

初山別郵便局長は、控えとして毎号1部ずつ『かもめの便り』を手元に残し、劣悪な紙質を裏に他の紙を貼ることで補強し、全号を1冊として綴った。このように、1冊に編綴され、戦後は局長宅にて保管されていたことで、大抵の慰問文は銃後から戦地へ送られるために残っていないことが多いにもかかわらず、『かもめの便り』は散逸を免れることができた。こうして、『かもめの便り』は全94号すべてが欠号なく現存している。厳密に言えば、慰問文として戦地に送られたものではないが、11号以降はガリ版刷りであるため、戦地に送られたものと同じと考えてよいだろう。このように、日中戦争初期からアジア・太平洋戦争末期まで長期間にわたり一資料群が存在していることは珍しく、貴重な資料群だと言えるだろう。

(2) 資料の性格と先行研究

『かもめの便り』は、全体は慰問という枠組みの中にもありながらも、その内容は〈村の情報〉、〈通信の情報〉、〈読者へのメッセージ〉の3つの要素から成り立つ。記事によっては、これら3つのうち複数の要素に跨ることもある。

『かもめの便り』を史料とした先行研究は、主に〈村の情報〉に注目してきた。戦時期の村の生活がわかる史料として同資料を活用したのが、1972（昭和47）年に編纂された初山別村史編集室編『初山別村史』初山別村役場、1972年である。また、同書では『かもめの便り』を村内の新聞・機関紙というメディアとして捉えて、「戦時下のきびしい言論統制あるいは物資窮乏の時代にあって挫折することなく、戦場と銃後のかけ橋の役割を果たした事績は特筆すべきことであろう。」と、高く評価した⁽²¹⁾。

大串潤児も、『かもめの便り』を「「銃後」と前線を結ぶメディア」⁽²²⁾と捉えた。大串は『かもめの便り』の〈村の情報〉を、「ユーモアあふれる文言だろう。しかし確実に「銃後」の生活統制を前線に報知するものでもあった」⁽²³⁾としている。また、〈通信の情報〉にも注目し、「郵便を配達するのみではなく、割り当てられている国債の消化、貯蓄奨励など、民衆に最も近い場所にあるものの一つである仕事を行う郵便局員が「独自に「便り」を刊行し続けたことはユニークな活動であった」⁽²⁴⁾と評価している。

以上のように、『かもめの便り』は主に、〈村の情報〉が詳細に記されているということと、受信者がいるということから、村内メディアや銃後と戦場を繋ぐメディアという機能で評価されてきた。

拙稿「『かもめの便り』から『はと』へ—北海道初山別村の慰問通信にみる銃後の意識—」⁽²⁵⁾においても、『かもめの便り』を銃後と戦場のネットワークを担うメディアとして捉えたが、3要素のうち〈村の情報〉に加え、〈読者へのメッセージ〉に注目した点が先行研究とは異なる。拙稿では、銃後の「国民意識」の一端を解明することを目的として、初山別村の戦争経過に伴う意識の変遷と、銃後の慰問文の役割を明らかにした。『かもめの便り』にみられる銃後の意識変遷の内容は、日中戦争開始当初は郷土出身兵の健康を気遣い凱旋を望む記事があったのが、ノモンハン事件以後に兵士の内面を神格化し、軍事郵便を通して兵士に手本となることを求めるようになった。アジア・太平洋戦争開戦以後は、アッツ島やガダルカナルでの村出身兵士の戦死を契機として、兵士へ戦意を鼓舞する言葉が優先的に選択されるようになった。戦争末期

21 初山別村史編集室編『初山別村史』初山別村役場、1972年、882～883頁。

22 大串潤児『「銃後」の民衆経験 地域における翼賛運動』岩波書店、2016年、49頁。

23 同上。

24 同上。

25 梅藤、前掲論文。

には慰問通信が兵士の元に届かなくなり、戦場と銃後のネットワークは崩壊しつつある中、村内読者を獲得していた『かもめの便り』には銃後の方へ戦うことを求める言説が現われる。兵士を個人名で呼びかけ、兵士と村民のコミュニケーションの場であった『かもめの便り』は、村の戦死者が増えていくに連れ、知り合いであった戦死者との個人的な繋がりを想起させるようなエピソードや言葉よりも、どの戦死者についても等しく「仇を討って下さい」という文言で、生きている兵士を総力戦遂行へと収斂させていく言葉を選択する。ここに、総力戦体制下の国家との同化がみられる。

ところで、3要素のうち〈通信の情報〉には、貯金など郵便局業務に関する事柄のほかに、通信報国団の活動も含まれる。『かもめの便り』作成に関する事柄も、通信報国団の活動であるため、ここに含まれるだろう。しかし、発行していた初山別郵便局共助会及び通信報国団の組織的性格については、筆者が拙稿⁽²⁶⁾で若干触れるまで、殆ど研究されてこなかった。ましてや、『かもめの便り』を通信報国団の分団資料として位置付け、通信報国団の活動を分析した研究は今までない。今回は、〈通信の情報〉を主な分析対象として、通信報国団分団の実態の一端を明らかにする。

(3) 今までの翻刻・復刻

本章の最後に、今までの『かもめの便り』の翻刻・復刻の刊行について整理する。

1970（昭和45）年、まず『初山別村史』に先駆けて刊行された『初山別村史資料』第2編に『かもめの便り』は抄録された⁽²⁷⁾。

次に、1981（昭和56）～1982（昭和57）年、『初山別村史』の村史編集係長を務めた柳本繁が、『北海道史研究』の紙面上にて、解題とともに日中戦争期の1937年12月第1号から1941年1月第38号までの翻刻を掲載した⁽²⁸⁾。

そして、2000（平成12）年には、初山別村開基100年・村制施行90年記念事業として、『かもめの便り』史料篇⁽²⁹⁾というタイトルで、全94号の復刻版が刊行された（以下「復刻版」と表記）。2013（平成25）年8月に筆者は、初山別村の元初山別村郵便局長旧宅である竹内家に保管されていた『かもめの便り』原本を閲覧・複写させてもらった。原本とこの復刻版を突き合わせて確認したところ、発行後に書き込まれたメモ的部分を除いて、原本にあるイラスト・紙面構成・文章など、すべてが復刻版で再現されていることがわかった。ただし、表題を除いた手書きで書かれた本文は復刻版では活字化されている。本稿の註において『かもめの便り』を出典とする場合は、より入手しやすい復刻版の頁番号を付記する。また、引用に当たっては旧字を新字に改めた。

2 初山別通信報国団の母体と前身

(1) 初山別郵便局と北海道初山別村

初山別通信報国団の母体となる初山別郵便局とは、1895（明治28）年に設置されていた風連^{ふうれん}

26 同上、101～104頁。本稿では、初山別通信報国団の組織的性格についてさらに詳しく分析する。

27 「かもめの便り抄」初山別村史編集室編『初山別村史資料』第2編、初山別村、1970年、71～126頁。

28 柳本繁解題「『かもめの便り』戦時期初山別郵便局より戦線兵士への郷土通信」1～6、北海道史研究会『北海道史研究』第25～30号、1981～1982年。柳本については、初山別村史編集室、前掲書、1972年、914頁参照。

29 初山別村、前掲書、2000年。



出典：初山別村『開基100年・村制施行90年記念要覧』資料編、2000年、2頁。

図1 初山別村の位置図

別郵便局が初山別番外地へ移転して、1898（明治31）年9月16日に聚参別^{しゅさんべつ}郵便局として発足した⁽³¹⁾。翌年からその次の年の間に初山別郵便局と改称し、1901（明治34）年12月11日に三等の初山別郵便電信局となった⁽³²⁾。さらに、初山別郵便局に改称したのは1903（明治36）年である⁽³³⁾。1906（明治39）年に第一種局に改訂され、1928（昭和3）年には市内郵便物の引受局に指定された⁽³⁴⁾。1941年2月1日には、通信官署における等級制の廃止に伴い、初山別郵便局は三等郵便局から特定郵便局（集配）となった⁽³⁵⁾。

初山別郵便局が所在する北海道^{とまへ}苫前郡初山別村は、北海道北西部に、日本海に面して位置する（図1を参照）。現在は留萌^{るもい}振興局が初山別を所管するが、『かもめの便り』発行当時は留萌支庁が所管していた。自治体としての初山別村の歴史は、1900（明治33）年に行政区域として新設されて、翌年に初山別村戸長役場が設けられたことに始まる。村では行政区域として新設された1900年を創基の年としている。1909（明治42）年には北海道二級町村制が施行された⁽³⁶⁾。

1945年の総人口は4,559人（そのうち、男2,220人、女2,339人）、世帯数は771戸であった⁽³⁷⁾。当時、村の主要産業は漁業であり、特に鯨漁の大漁・不漁は村全体の景気を大きく左右するほどだった⁽³⁸⁾。戦時期、村内には他に豊岬^{とよさき}郵便局、有明^{ありあけ}郵便局の2局があった⁽³⁹⁾。村内で一番歴史が古く、中心市街地に位置するのが初山別郵便局である。

-
- 30 初山別の別表記。初山別村史編さん委員会編『新初山別村史』初山別村、2013年、1060頁。
- 31 佐々木秀司編『北海道郵便局の移り変わり』北海道出版企画センター、1998年、186頁。初山別村史編集室、前掲書、1972年、679頁。初山別村史編さん委員会、前掲書、634頁。
- 32 「逓信省告示」第503号『官報』第5530号、1901年12月7日、132頁。佐々木、前掲書、186頁。初山別村史編集室、前掲書、1972年、679頁。
- 33 佐々木、前掲書、186頁。初山別村史編集室、前掲書、1972年、679頁。
- 34 初山別村史編集室、前掲書、1972年、679～680頁。
- 35 佐々木、前掲書、186頁。
- 36 初山別村史編さん委員会、前掲書、167～168頁。北海道二級町村制の施行と特徴については、鈴江英一『北海道町村制度史の研究』北海道大学図書刊行会、1985年、441～444頁を参照。
- 37 初山別村『開基100年・村制施行90年記念要覧』資料編、2000年、3頁。
- 38 初山別村史編集室、前掲書、1972年、265頁。
- 39 同上、682～685頁。

(2) 初山別郵便局共助会

『かもめの便り』第1～57号までは、初山別郵便局共助会によって発行された。この初山別郵便局共助会（以下「共助会」と表記）が、初山別通信報国団の前身組織である。共助会に関しては、1990年代に元局員が「共助会は、本を読んだり講師を迎えて勉強する会だった。それが、戦局が激しくなって通信報国会に変わっていったんです。」との証言をしている⁽⁴⁰⁾。

1930（昭和5）年、共助会は「“相互教育”による精神修養を目的」とした局員たちの「自主的な“話しあい”の場」として発足した⁽⁴¹⁾。毎月1～2回集まり、後藤静香が主宰する小冊子⁽⁴²⁾を輪読してその内容について話し合うという非公式の読書会を行っていた。蓮沼門三が指導する「修養団」⁽⁴³⁾の幹事をしていた後藤静香（1884～1969）は、1918（大正7）年に教化団体「希望社」を創設した⁽⁴⁴⁾。希望社の目的は「皇室ヲ中心トシタ社会教化」⁽⁴⁵⁾であり、全国各地に読者組織が作られ、読者の直接購読によって希望社の冊子は普及した。共助会で読書会が始められた1930年には希望社の誌友は100万人に達している⁽⁴⁶⁾。同年に発行された『希望社大観』によると、希望社は『希望』『のぞみ』『泉の花』『光と声』の4種類の月刊修養冊子を当時発行しており⁽⁴⁷⁾、この中のいずれかの修養冊子を共助会で読んでいたと考えられる。中央教化団体連合会『全国教化団体名鑑』に掲載された希望社の事業は「一、社会ノ倫理化」「二、教育ノ生産化」「三、産業ノ教育化」の3つであり、三のうち「相互教育二関スル方面」の具体的活動には「読書中心ノ相互修養会ノ奨励」とある⁽⁴⁸⁾。共助会の読書会はこの事業に当てはまるだろう。大澤絢子によれば、明治30年代半ばから40年代に修養ブームが到来した⁽⁴⁹⁾。赤澤史朗は、日露戦争以後大衆の間に「大衆の主体形成の方法」として「修養のための読書」が普及したとしている⁽⁵⁰⁾。それに加え、1920年代は民間の修養団体が活躍し、修養思想が流布していた⁽⁵¹⁾。初山別村がある留萌地方では、社会教育施設がなかったために、明治末から大正にかけて、場所を選ばない「修養会」が各地で作られていた⁽⁵²⁾。初山別村も例外ではなく、青年学校ができるまでは高等小学校までしか教育施設は存在せず⁽⁵³⁾、青少年以降に教育を受ける機会は極めて限られていた。このような状況にある村内で、郵便局局員にとって主体形成のための社会教育の場を初期の共助会は担っていたと考えられる。

1935（昭和10）年、後に『かもめの便り』編集で中心的役割を担う竹内得一が、初山別郵便

40 鈴木、前掲書、7頁。

41 1963（昭和38）年に竹内得一局長によって記された「『職場を明るくする方法』—当局の「共助会」について—」というレポートを、1999年に子息の竹内昭太郎氏が要約した文章が、『かもめの便り』史料篇に掲載されている。以下、共助会については、断りがない限り本レポートを出典として叙述する。

42 竹内局長は、小冊子の表題を『心の家』としているが、後藤静香が『心の家』を出版したのは1933（昭和8）年より後であるため、誤りだと思われる。齋藤智哉「女教員の修養における身体の表象—後藤静香の希望社運動—」『日本教師教育学会年報』第13号、2004年、76頁。

43 大澤絢子『「修養」の日本近代 自分磨きの150年をたどる』NHK出版、2022年、223～225頁を参照。

44 齋藤、前掲論文、75～76頁。

45 中央教化団体連合会『全国教化団体名鑑』中央教化団体連合会、1929年、269頁。

46 赤澤史朗『近代日本の思想動員と宗教統制』校倉書房、1985年、31頁。

47 希望社全日本連盟『希望社大観』希望社出版部、1930年、3頁。

48 中央教化団体連合会、前掲書、269頁。

49 大澤、前掲書、23頁。

50 赤澤史朗『戦中・戦後文化論 転換期日本の文化統合』法律文化社、2020年、278～279頁。

51 赤澤、前掲書、1985年、28頁。

52 北海道立教育研究所編『北海道教育史』地方編1、北海道教育委員会、1955年、634頁。

53 『初山別村村治概況』1938（昭和13）年、北海道立文書館所蔵。

局長に就任した⁽⁵⁴⁾。管理者である竹内局長によって、「協議報告」という業務打ち合わせの時間が加えられて、共助会は自主的な読書会から、郵便局における公的な管理運営手段の1つとなるという大きな変化を遂げた。竹内局長によって特に留意されたのは、共助会を「公式集団の目的と同化させることであった」。そのために重要とされたことが「心と心がふれ合うという精神的なつながり」である⁽⁵⁵⁾。

ここから、会の性格として、個人の修養よりも、労使一体実現といった色彩が濃くなったと考えられる。

通信部内には、1926（大正15）年に公布された「通信部内従業員会規程」による従業員会が各職場で結成されることがあった⁽⁵⁶⁾が、共助会が従業員会の1つかどうかは資料がないためわからない。通信報国会では局長が先頭に立って指導することが求められたのに対し、従業員会では局長は会員にはなれないという違いがあった⁽⁵⁷⁾。共助会では、局長がリーダーシップをとっているの、従業員会ではない可能性が高い。

戦時中、『かもめの便り』において、共助会会員・通信報国団団員たちは、自らを「かもめ部員」と称し、自らが所属する団体を「かもめ部隊」と記した。本稿でも、次章以降において、場合によってはこの「かもめ部員」「かもめ部隊」と当時と同じ呼称を採用する。

③ 『かもめの便り』にみる初山別通信報国団

表1は、初山別通信報国団成立以降の『かもめの便り』第58～94号、1942（昭和17）年8月～1945年8月から読み取った初山別通信報国団活動・初山別郵便局・通信に関する話題を分類した表である。判読不能な字は「□」とした。

『かもめの便り』には比喻・暗喩が多く、わかりにくい記事も多い。これは検閲を意識しているからだと考えられる。また、兵士に送るために心配かけまいとしているためか、ことさらユーモア溢れる描写が多々みられる。

表1にあげた事柄は、あくまで『かもめの便り』に掲載されている内容から読み取った事柄で、掲載されていない活動もあったかもしれない可能性をここに述べておく。また、郵便局と通信報国団の活動を明確に区別できるものもあれば、区別できないものもあった。そのため、初山別通信報国団活動・初山別郵便局・通信に関する話題を採取して表を作成し、内容から独自に分類した（表1「内容の分類」の項目参照）。「『かもめの便り』事項欄」の項目は、『かもめの便り』紙面上における掲載箇所の事項名を記述している。

この表1から、初山別通信報国団の組織と活動について考察を行いたい。

(1) 組織

1942年8月発行の『かもめの便り』第58号⁽⁵⁸⁾において、「正しい我が国体精神を体得し、真の日本人として通信行政の職域分野に御奉公の誠を謁さんとして大臣を総裁に戴き全従事員を打って一丸とした通信報国団が結成され、我が共助会も之に発展的統合を見るに至った。」⁽⁵⁹⁾と初山別通信報国団が成立したことが記されている。これ以後、最終号まで発行元は「初山別

54 初山別村史編集室、前掲書、1972年、682頁。

55 竹内、前掲文。

56 後藤、前掲論文、2014年、34頁。

57 郵政省編『続通信事業史』第2巻、職員、前鳥会、1961年、648頁。

58 初山別村編『かもめの便り』史料篇、130～131頁。

『かもめの便り』号数	年	日付	出来事	内容の分類	『かもめの便り』事項欄
58	1942		初山別郵便局共助会が通信報国団へ発展的統合。初山別通信報国団に改称	初山別通信報国団成立	特信
58~94	1942~1945	毎月7日	〇慰問通信『かもめの便り』発行	統後後援	
58	1942	7月8日	貯蓄54万円完成協議会	国債・貯金・保険	村の展望
59	1942	8月22日	通信報国団深留第三分団連練会にかもめ部員出席。訓練参加 ※深留…深川・留萌の略か？	通信報国団練成会	人の動き
59	1942	9月6日	札幌藤ノ沢通信練成道場における報国団中堅幹部錬成への管内1名参加に局員が選別され、出発	通信報国団練成会	人の動き
59	1942		隣の遠軽町民が「弾丸債権（ママ）」（戦時郵便貯金切手）に当選し、当選金を献金 「ナンと胸のすく話ではないか。」 ※「弾丸債券」の誤記か？	国債・貯金・保険／献金	村の話
60	1942	10月2日	かもめ部員奉仕活動：局玄関・集配出入口・私宅玄関・勝手口土間をコンクリート張りに ※私宅とは局長宅か？	奉仕活動	村の展望
60	1942	10月3日	貯蓄奨励映画と公演の会	映画・講演	村の展望
63		10月31日	漁船による機雷発見・除去を海上輸送航路保安の功績として通信大臣が表彰	通信大臣表彰	村の話／特信
61	1942		戦時報国債権（ママ）当選のエピソード ※「債券」の誤記か？	国債・貯金・保険	景気
61	1942	11月1日	国防献金6000枚の一銭銅貨に為替係も目を回す	献金	村の展望
61	1942		国債消化管内第1位	国債・貯金・保険	特信
62	1942	11月25日	かもめ部員送別会 ※出征兵士送別会と思われる	初山別通信報国団団員の出征	村の展望
63	1942	12月18~	防空通信伝達訓練施行	訓練	村の展望
64	1943	1月27日	遠別から初山別郵便局へ1名赴任	人事	人の動き
64	1943	1月30日	ニセコアンヌプリスキー場における通信従業員幹部練成会にかもめ部員1名が選抜され参加	通信報国団練成会	人の動き
64	1943	2月5日	弾丸債券（戦時郵便貯金切手）当選	国債・貯金・保険	村の展望
65	1943		初山別村、建艦献金が人口割合では管内第1位。／村の勤労報国隊が国防献金。「これこそ生産拡充戦に雄々しく咲いた美談」	献金	村の話
66	1943	3月31日	初山別郵便局赴任及びかもめ部員として加入した1名の挨拶	人事	特信
67	1943	4月15日	村内国民貯蓄組合長会議にて割り当て目標消化の熟議	国債・貯金・保険	村の展望
67	1943	4月20日	「我等の通信記念日」部会長臨席の式	通信記念日	村の展望
67	1943	5月1日	通送人の交代	人事	人の動き
67	1943		窓口に来た人の名前	初山別郵便局窓口業務	人の動き
67	1943		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「お便りを戴き報国団も愈々張って（ママ）居ります。」	初山別通信報国団の様子	ポスト
67	1943		鯨漁の人員確保のために電報が大量に送られ、「前線に負けずカモメ部員も大いに頑張りました」	初山別通信報国団の様子 ／初山別郵便局の出来事	特信
68	1943	5月11日	かもめ部員新加入	人事	人の動き
68	1943	5月	かもめ部隊長の奥座敷押し入れに子猫数匹誕生で大騒ぎ	初山別通信報国団の様子	慶弔
68	1943	5月8日	主査が11年勤続で表彰	局員表彰	慶弔
68	1943	5月23日	局前薪小屋に通送手が運んだ黒蛇が逃げて駆除	初山別郵便局の出来事	村の展望
69	1943	6月8日	初山別通信報国団15名が早朝5時に局長を先頭に武装して稲荷神社参拝、皇軍将兵武運長久祈願	武運長久祈願	村の展望
69	1943	6月18日	母校（国民学校か？）運動会に各団体参加。かもめ部員が三等入賞	初山別通信報国団の村内行事参加	村の展望
69	1943		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「我等報国団でお守りして居りますご安心の程を」 ※出征したかもめ部員戦死に関する連絡だと考えられる	初山別通信報国団団員の戦死	ポスト
69	1943		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 出征兵士と初山別報国団団員の邂逅についての感想	統後後援	ポスト
70	1943	7月29日	かもめ部員含む戦死者の村葬	初山別通信報国団団員の戦死	村の展望
70	1943	8月1日	戦死したかもめ部員の遺家族が離村	初山別通信報国団団員の戦死	人の動き
70	1943	8月1日	かもめ部員早朝に稲荷神社へ皇軍の武運祈願	武運長久祈願	村の展望

59 同上、131頁。ただし、昭和16年10月の『かもめの便り』第47号に通信報国団行事（支団が実施したとみられる）へ参加した記事はある。後述する「通信報国団規定」の改正前であることもあり、第58号以後の初山別通信報国団とは異なり、同記事における「分団」はただ局を言い換えたに過ぎず、組織的には未整備だったと考えられる。同、106頁。

『かもめの便り』号数	年	日付	出来事	内容の分類	『かもめの便り』事項欄
70	1943	8月1日	かもめ部員が、スマトラ建設部隊員から南方発展の話を聞く	映画・講演	村の展望
70	1943		出征兵士へ戦死したかもめ部員の「仇はキツ討って下さい」と呼びかけ	初山別通信報国分団員の戦死	ポスト
71	1943	8月27日	かもめ団長（局長）の家で女子誕生	初山別通信報国分団員の慶弔（戦死を除く）	人の動きと慶弔
71	1943		北海道愛国機献納運動への村民の献金 「アツツの玉砕勇士に於て、ボンと献金致しました。この尊い赤心には村民も強く胸を打たれました。」	献金	村の話
71	1943		出征兵士へ戦死者の仇を討つことを呼びかけ 「仇はキツと頼みます」「（戦死者名）に続いて下さい」	初山別通信報国分団員の戦死	ポスト
72	1943		かもめ部員へ餅特配	初山別通信報国分団の様子	景気
72	1943	9月17日	局員が札幌通信局長より表彰	局員表彰	慶弔
72	1943	9月27日	豊岬局主査の兄が除隊	他局の情報	人の動き
72	1943		初山別通信報国分団から出征兵士へのメッセージ 「カモメニュース会社の社長サン始め皆元気です」	初山別通信報国分団の様子	ポスト
73	1943		「今月は年金に保険国債の大進撃だ。」	国債・貯金・保険	景気
73	1943		初山別通信報国分団から出征兵士へのメッセージ 「かもめ部員も御期待にそう様やりますわ」	初山別通信報国分団の様子	ポスト
74	1943		「（戦死者名）上等兵奮戦状況」 かもめ部員の戦死状況	初山別通信報国分団員の戦死	特信
75	1943	12月1日	かもめ部隊長（局長）入院・全快	初山別通信報国分団の様子	人の動き
75	1943	12月26日	初山別郵便局に新たな通送手	人事	人の動き
75	1944		貯金	国債・貯金・保険	景気
75	1944	1月	翼壮献金箱に献金あり	献金	村の話
75	1944		初山別通信報国分団から出征兵士へのメッセージ 「かもめ部員も元気です」	初山別通信報国分団の様子	ポスト
76	1944		初山別通信報国分団から出征兵士へのメッセージ 「カモメ部員も愈々元気です」	初山別通信報国分団の様子	ポスト
76	1944		初山別通信報国分団から出征兵士へのメッセージ 「神国の“福豆弾”を送ります。ルーズベルトを一日も早く打ちつけて下さい」	銃後後援	特信
77	1944	2月19日	通送手の妻死去	通信関係者の慶弔	慶弔
77	1944	2月20日	局員が札幌通信講習所に合格	人事	慶弔
77	1944	2月26日	豊岬通送手が100円の代物を拾う	他局の情報	村の展望
77	1944	2月29日	豊岬局長息子が狐を拾う	他局の情報	村の展望
77	1944		初山別通信報国分団から出征兵士へ受け継いだ読書部会計報告 ※初山別通信報国分団に読書部があったのではない	読書部	ポスト
77	1944		出征兵士の間で『かもめの便り』人気	『かもめの便り』に関すること	ポスト
78	1944	3月9日	村民の航空隊への献金	献金	村の展望
79	1944		鯨の大漁。 「拾万や貳拾万の貯蓄はなんだ。国債はなんだ。必ず初浦号は飛んで行くぞ。」 ※「初浦」は初山別市街地の地名	国債・貯金・保険	景気
79	1944	4月10日	昭和19年度貯蓄目標達成協議会	国債・貯金・保険	村の展望
79	1944	4月14日	窓口に仔馬が生まれた村人來局	初山別郵便局窓口業務	慶弔
79	1944	4月20日	第11回通信記念日。常会。婦村者から東京の話を聞く。	通信記念日／初山別通信報国分団常会	村の展望
79	1944	4月25日	かもめ部隊長（局長）の女児が死去	初山別通信報国分団員の慶弔（戦死を除く）	慶弔
79	1944	5月1日	電信普通部第1期卒業生が着任	人事	人の動き
79～85	1944	5～11月	「異動あったら御知らせ下さい。」所属部隊名と兵士名記載 ※所在不明兵士の増加で『かもめの便り』が送れない	『かもめの便り』に関すること	銃後
80	1944	5月15日	局長女児の遺骨が帰村	初山別通信報国分団員の慶弔（戦死を除く）	慶弔
80	1944	5月29日	アツツ島玉砕勇士1周年。初山別通信報国分団員一同武装して早朝神社参拝。冥福と前線兵士の武運長久祈願	戦死者慰霊／武運長久祈願	村の展望
80	1944		出征兵から手紙貯金	国債・貯金・保険	ポスト
81	1944	6月12日	電話窓口の係員へ利用者が50銭寄付	初山別郵便局窓口業務	村の展望
81	1944		「村は常会、青年団を通じ弾丸！！兵器！！飛行機！！となる国債消化・貯蓄増強に拍車をかけている。」	国債・貯金・保険	村の話

『かもめの便り』号数	年	日付	出来事	内容の分類	『かもめの便り』事項欄
81	1944		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「先月号戻ってきました、お元気でせうね。」 ※兵士の所在不明	『かもめの便り』に関すること	郵便函
81	1944		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「我報国団の人方も相変わらずです」	初山別通信報国団の様子	郵便函
81	1944		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「かもめの便りを待つ身・又受ける身、嬉しいことでせうね」	『かもめの便り』に関すること	郵便函
82	1944	7月20日	遠別の前郵便局長死去	通信関係者の慶弔	慶弔
82	1944		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「銃後も負けず貯蓄に又保険に馬力をかけております。」	国債・貯金・保険	郵便函
83	1944	8月21日	ガダルカナルで戦死したかもめ部員の三回忌	初山別通信報国団団員の戦死	慶弔
83	1944		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「カモメの便り世界で一番とのこと、かもめ部員大喜び益々張切っております」	『かもめの便り』に関すること	郵便函
84	1944	9月24日	定額貯蓄懇談会	国債・貯金・保険	村の展望
84	1944	10月4日	初山別局の交換台に落雷。電話線全部断線	初山別郵便局の出来事	村の展望
85	1944	10月20日	他局見学。第1班は羽幌。第2班は遠別。	他局訪問	村の展望
85	1944	10月26日	他局への転任者と、初山別への赴任者	人事	人の動き
85	1944		『かもめの便り』発行を振り返って	『かもめの便り』に関すること	特信
86	1944	11月13日	遞送手の馬が流産	初山別郵便局の出来事	慶弔
86	1944		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「かもめの御熟読を知り部員一同張切っております」	『かもめの便り』に関すること	郵便函
86	1944		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「かもめ通報を調べる度に当時の(かもめ部員の出征兵士名)方の御苦労思はれます」	『かもめの便り』に関すること	郵便函
87	1944	12月21日	札幌通信講習所電信科第4期生が初山別郵便局へ赴任	人事	人の動き
87	1945	1月3日	「かもめ部隊の新年常会」 お膳・お汁粉など食事の後、2組対抗でじゃんけんをし国民歌と詩吟民謡を歌う	初山別通信報国団常会	村の展望
87	1945	1月5日	「かもめ通信特攻隊親睦の夕」 ライスカレー会食、かるた・トランプ大会	初山別通信報国団親睦	村の展望
87	1945		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「故郷の新聞とは驚きました 記者も頑張ります」	『かもめの便り』に関すること	私書函
88	1945	1月7日	初浦第二町内初常会にてかもめ部隊長(局長)による紙芝居上演	他団体交流	村の展望
88	1945	1月21日	「かもめ特攻隊員」紙芝居上演会 ※局長・局員による	初山別通信報国団親睦	村の展望
88	1945		初山別通信報国団から出征兵士へ、局員が「近い内に行きますどうぞよろしく」と挨拶 ※出征か?	初山別通信報国団団員の出征?	私書函
89	1945	2月9日	豊岬局長死去	通信関係者の慶弔	慶弔
89	1945	2月10日	雨雪風で郵便不通	郵便状況	村の展望
89	1945	2月21日・22日	かもめ部員スキー錬成	通信報国団練成会	村の展望
89	1945	2月	読書部2月末現在の会計報告	読書部	私書函
89	1945	3月1日	かもめ部員一同武運長久祈願	武運長久祈願	村の展望
89	1945	3月1日	第二栄常会でかもめ部員が紙芝居実演 ※栄は初山別村内の地名	他団体交流	村の展望
89	1945	3月2日	かもめ部員「神鷲学校」へ出発 ※神鷲は特攻隊を意味する。軍の飛行学校や訓練所のことか?	初山別通信報国団団員の軍関係学校への進学	人の動き
89	1945	3月2日	航空兵学校へ進学すると思われるかもめ部員送別会	初山別通信報国団団員の軍関係学校への進学	村の展望
89	1945	3月4日	かもめ部隊長(局長)宅で男子誕生	初山別通信報国団団員の慶弔(戦死を除く)	慶弔
89	1945		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「カモメ部員は皆相変わらずです。」「ハリキツております」	初山別通信報国団の様子	私書函
90	1945	3月23日	かもめ部員「御召」で出発 ※出征か?	初山別通信報国団団員の出征?	人の動き
90	1945	3月23日	航空兵関係の学校へ進学したかもめ部員が一時復局	人事	人の動き
90	1945	3月31日	手持ち現金の貯金 「手持現金応召」	国債・貯金・保険	村の展望/ 村の話
90	1945	4月1日	初山別通信報国団かもめ部員12名が、早朝に昭和20年の決意も新たに、皇軍の武運長久祈願	武運長久祈願	村の展望

『かもめの便り』号数	年	日付	出来事	内容の分類	『かもめの便り』事項欄
90	1945		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「部員一同留守懸命です」「かもめ一日千秋の思ひで待たれる様子部員一層張切ってます」	初山別通信報国団の様子	私書函
90	1945		出征遺家族がかもめ部員に「お世話になります」と挨拶し、御馳走	出征遺家族	私書函
91	1945	4月15日	豊岬局局長後任人事	他局の情報	人の動き
91	1945	4月18日	かもめ部員に男児誕生	初山別通信報国団団員の慶弔（戦死を除く）	慶弔
91	1945	4月20日	通信記念日 第170回常会 札幌通信局長から団体表彰・かもめ部員1名個人表彰	通信記念日／ 通信報国団常会／ 局長表彰	村の展望
91	1945		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「保険完成の月内外勤共に拍車をかけて居ります。」	初山別郵便局の出来事／ 国債・貯金・保険	私書函
92	1945	5月29日	アツ島玉砕記念日 早朝、かもめ部員全員で忠魂碑参拝	戦死者慰霊	村の展望
92	1945	6月1日	かもめ部員心の送別会	初山別通信報国団団員の 軍関係学校への進学	村の展望
92	1945	6月1日	郵便事業功労者として村の3名が通信局長表彰	通信局長表彰	村の展望
92	1945	6月2日	かもめ部員1名飛行系の学校へ出発	初山別通信報国団団員の 軍関係学校への進学	人の動き
92	1945	6月5日	通信事業従業員も国家の要請に基づき現員徴用実施となったことから、 □用令書交付式挙行 ※徴用令書と思われる	通信事業従業員の徴用	村の展望
92	1945		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「御丁寧な御便りに部員一同再奮起しました。」 「職場もみな特攻精神で副部隊長に続き奮闘して居ります」	初山別通信報国団の様子	私書函
92	1945		通信院の発足	通信行政	電波
93	1945	6月11日	通送人の子供死去	通信関係者の慶弔	慶弔
93	1945	6月17日	かもめ部員送別会	人事	村の展望
93	1945	6月17日	新人かもめ部員の紹介	人事	村の展望
93	1945		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「かもめ本部も沖繩戦に負けず頑張ってます」	初山別通信報国団の様子	私書函
93	1945		初山別通信報国団から出征兵士へのメッセージ 「保険・積立目標額も大丈夫です」	国債・貯金・保険	私書函
94	1945	7月15日	留萌に艦載機来襲 「通信隊員大いに張り切る」	空襲への対応	村の展望
94	1945	8月1日	かもめ部員一同で早天参拝、武運長久祈願	武運長久祈願	村の展望
94	1945		草取りの礼金をすべて貯蓄	国債・貯金・保険	村の話
94	1945		通信も通信義勇隊編成	義勇隊	電波
94	1945		通信□□精神発揚	銃後の決意	電波
94	1945		返送されてくる『かもめの便り』あり、送り先伝達のお願い	『かもめの便り』に 関すること	特信
94	1945		謄写版印刷用インキ寄贈のお願い	『かもめの便り』に 関すること	特信

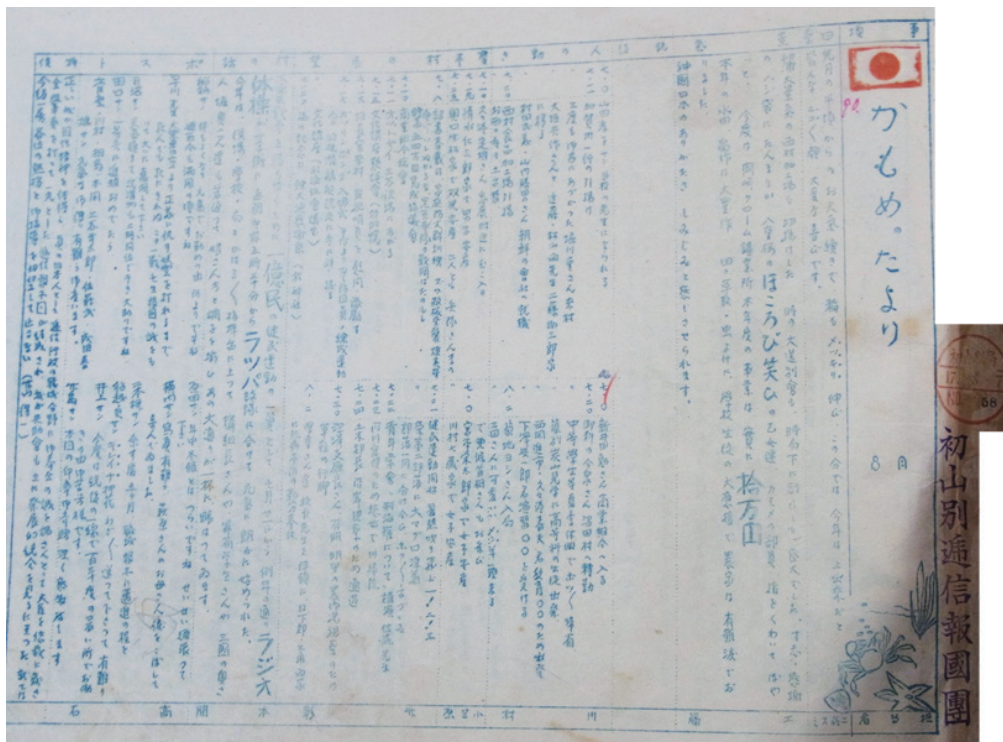
「」は『かもめの便り』からの引用

表1 『かもめの便り』第58～94号にみる初山別通信報国団活動・初山別郵便局・通信に関する話題

通信報国団」とクレジットされた。

初山別通信報国団が成立した記事が掲載された1942年8月は、通信報国団の結成から既に1年4か月が経過している。このタイムラグについて考察してみたい。1941年4月12日の「通信報国団規程」（公達第373号）別表⁽⁶⁰⁾において、支団と定められているのは、本省・貯金局・灯台局・各通信局である。それぞれの支団には分団が存在する。各通信局の分団は、各通信局・通信局各工務出張所・各通信官署の3種類となっている。本規程によれば、初山別郵便局は、札幌通信局支団の分団を結成することになる。しかし、当時、特定郵便局は約1万3,000局⁽⁶¹⁾

60 山尾一『産業報国運動全書』日刊産業厚生時報社出版部、1941年、615頁。



(2013年8月21日初山別村役場にて筆者撮影)
左端の「特信」欄に、初山別郵便局共助会から初山別通信報國団に発展統合したことが、局長によって記されている。
写真1 初山別通信報國団に改称された『かもめの便り』第58号、昭和17年8月7日発行

あり、そのすべてで一斉に分団を結成することが可能であったとは考えにくい。1942年6月発行の『大通信』第76号によれば⁽⁶²⁾、同年4月27日の「通信報國団規程」の改正（公達第390号）で、特定局の分団について見直された。従来では、原則特定局は1つの分団を組織し、例外として定員が少ない局が数局まとまって分団を組織することもあったが、それでは分団の結成が進まなかったようである。同改正によって、特定局は、特定局長会の部会ごとに分団を組織することになった。『かもめの便り』第59号、1942年9月には、通信報國団深留第三分団練成会にかもめ部員が出席したとある⁽⁶³⁾。『大通信』第80号には、札幌支団の分団の1つに「深留地方第三区」⁽⁶⁴⁾があった。「深留」は深川・留萌^{ふかがわ るもい}の略だと思われる。初山別通信報國団は、深留地方第三区通信報國分団を構成する団体であったと推測できる。このように、通信報國団分団の結成には、郵便局の既存組織を衣替えることや既存の組織を集めて対応した事例が相当数あるのではないだろうか。

(2) 活動

武運長久祈願や練成会などへの参加は、先行研究⁽⁶⁵⁾でも明らかにされている通りであり、分団を構成する一組織においても積極的に活動が行われていることがわかる。ここでは、他の通信報國団との活動、初山別通信報國団内部の活動、銃後後援活動に分けて考察したい。

まず、他の通信報國団との活動に関しては、(1)で触れた通信報國団深留第三分団練成会の他

61 郵政省編『郵政百年史』通信協会、1971年、600頁。

62 通信省管理局現業調査課『大通信』第76号、1942年6月、10～11頁、郵政博物館所蔵。

63 初山別村編『かもめの便り』史料篇、132頁。

64 同『大通信』第80号、1942年10月、108頁、郵政博物館所蔵。

65 後藤、前掲論文、2014年、39～44頁。同、前掲論文、2022年。

にも、例えば1943年2月発行の第64号には通信従業員幹部練成会へ選抜されたかもめ部員1名の参加が記載されていた⁽⁶⁶⁾。これはニセコのスキー場で行われたスキー練成会で、参加するかもめ部員への「祈熱闘」「荒熊の意気 逋友より」という応援の寄せ書きを、報国団で作成している⁽⁶⁷⁾。そこにある応援メッセージには、「出すは今なり我団の底力」や「我等の底力を出すときは今ぞ!」という言葉などがあり、通信従業員幹部練成会へ派遣された1名を団の代表と見なしていることと、他の団への対抗意識が垣間見れる。通信報国団は「大通信一家族主義」を基本理念としていたが、各郵便局の枠組みを維持したまま組織されることで、練成会など他団との合同活動において、活動の内容によってはかえってライバル意識を抱くこともあったと考えられる。『かもめの便り』には、1942年11月の第61号にある国債割当消化管内第1位⁽⁶⁸⁾の例のように初山別郵便局の管内における成績についての記述もある。そもそも各郵便局が、自局がより良い成績を上げることを意識していれば、自ずと通信報国分団も他より抜きん出たことを考えることもあるのではないだろうか。『大通信』には、投稿された作品には必ず団員名と団員の所属する局が記載されており、投稿者は局を代表しているかのようであり、「大通信一家族主義」を実現するために局の垣根を取り払おうという姿勢は見えない。この通信報国団の理念である「大通信一家族主義」は、戦時中の家と同じように一員にそれぞれの適する役割こそ求め、相和すことを主目的とはしていなかったのではないだろうか。「大通信一家族主義」とは何か、どのような逋友の在り方や具体的な意識を共有しようと思定していたものだったのかまでは、本研究の範囲では判断がつかないため、今後の資料調査・分析を必要とするだろう。

一方、初山別通信報国団内部の活動も活発に行われていた。初山別通信報国団常会を定期的に開催し、1945年5月第91号の時点では170回に及んでいる⁽⁶⁹⁾。団員の慶弔に関する情報の掲載があることは共助会時代と変わらないが、戦局が悪化するにつれて団員の戦死についての記事も登場した⁽⁷⁰⁾。村の戦死者が増加した⁽⁷¹⁾アツツ島玉砕以降戦争末期まで、冬を除いて定期的に稲荷神社や忠魂碑において、かもめ部員全員で武運長久を祈願した⁽⁷²⁾。また、文化的な活動の記録もある。1944（昭和19）年3月第77号、1945年3月第89号に読書部の会計報告がされている⁽⁷³⁾ことから、初山別通信報国団内に読書部が設けられ、共助会時代からの読書に関する活動を引き継いでいることがわかる。1945年には地域の常会でかもめ部員による紙芝居を上演するようになる⁽⁷⁴⁾など、初山別通信報国団は地域の他団体と交流し、活動の場を広げた。

初山別通信報国団が主に行っていた銃後援活動こそ、慰問通信『かもめの便り』の発行である。『かもめの便り』発行に対して、兵士や出征遺家族からの好反響について記された記事が同通信の所々に掲載されている。例えば、1944年3月の第77号には、出征兵士へのメッセージとして「初山別のカモメ人気とのこと、部員一同ハリキツて居ります。」⁽⁷⁵⁾とあり、このような好反響がかもめ部員に遣り甲斐を感じさせ、戦争末期に資材入手が困難⁽⁷⁶⁾になろうとも

66 初山別村編『かもめの便り』史料篇、146頁。

67 同上、144～145頁。

68 同上、137頁。

69 同上、201頁。

70 同上、167頁。

71 初山別村史編集室、前掲書、1972年、704～707頁。梅藤、前掲論文、113～114頁。

72 初山別村編『かもめの便り』史料篇、157、159、179、197、199、203、207頁。

73 同上、173、197頁。

74 同上、195、197頁。

75 同上、173頁。

発行を続ける原動力となったと考えられる。1945年1月の第87号によると、『かもめの便り』は出征兵士から「故郷の新聞」と評されていたようだ⁽⁷⁷⁾。戦争末期には兵士たちの間で『かもめの便り』は、戦場と銃後を繋ぐメディアとして確たる地位を築いていたようである。さらに、同年4月の第90号には、出征遺家族が「かもめ部員にお世話になりますと」御馳走してくれたことが記されている⁽⁷⁸⁾。兵士にとって『かもめの便り』が支えになっていたことを、故郷の側でも認識していたことが窺える。地域社会にとって身近な存在である郵便局による産業報国団体が、戦争末期に至っても銃後援を継続し続けることで、「大通信一家族主義」を超えて、地域社会との結びつきをより強くしていった様子がみられる。

(3) 宣伝

『かもめの便り』には、郵便局の業務として取り扱っていた債券・貯金・保険及び、国防献金に関する話題が多い。特に、具体的人名をあげて、債券購入や貯蓄、献金をしたエピソードを掲載している。例えば、1942年9月第59号には戦時郵便貯金切手に当選した商店の主人が「感激をソツとソノママ、ポンと献金、ナンと胸のすく話ではないか。」⁽⁷⁹⁾や、1943年9月第71号の「これまで辛抱して蓄へた汗の結晶100円を、アツの玉碎勇士に応へて、ポンと献金致しました。この尊い赤心には村民も強く胸を打たれました。」⁽⁸⁰⁾と商店名や氏名を挙げて、はっきりと誰かわかるように記事にしている。これらは、通信報国団の活動として行っていることではない。しかし、初山別通信報国団で発行している『かもめの便り』で郵便局業務に触れていることに意義を見出すことができる。上記のように「美談」として取り上げることによって、読者への戦時政策の宣伝という効果を果たしたと考えられる。そういう意味では、通信報国団は戦時政策の宣伝活動を行っていたと言えるだろう。

簡単にまとめてみたが、全体的に見て、初山別通信報国団の活動は、『産業報国運動要綱』にある産業報国会事業に多くの点で当てはまる⁽⁸¹⁾。初山別通信報国団の活動は、産業報国運動の制度設計を反映していると言えるだろう。また、戦後に竹内局長が、戦時期の共助会は「地域社会の協力を得る通じ合いへの努力を始めた」と回顧している⁽⁸²⁾。共助会が通信報国団となっていた時期には、活動を通じて地域へ影響力を高めていったことが『かもめの便り』から読み取れる。

おわりに～戦後の“かもめ”～

本稿を終えるにあたって、戦後に繋がる労使関係と地域における役割の2点について考えてみたい。

戦後、通信報国団は解散したが、初山別通信報国団は初山別郵便局共助会に戻り、少なくとも昭和30年代まで活動を続けたことがわかっている⁽⁸³⁾。産業報国会が戦後の企業別労働組合

76 戦争末期には、インク不足などで発行に困難を伴っていたことが窺える。同上、207頁。

77 同上、193頁。

78 同上、199頁。

79 同上、133頁。

80 同上、161頁。

81 厚生省労働局、前掲、118～119頁。

82 竹内、前掲。

83 同上。

へ繋がったと同じように⁽⁸⁴⁾、戦後、初山別郵便局においても「労使一体」の活動は続けられたのである。

また、『かもめの便り』は戦後、約1年の中断を経て『はと』と改題し、発行が続けられた⁽⁸⁵⁾。戦後の『はと』からは、一見、文化国家・平和国家建設の意識が読み取れる。しかし、読者に提示するスローガンが総力戦遂行から文化国家・平和国家建設へ変わっただけで、読者へは国家に従い、国家の要求を満たすように励むことを求める態度は同じであった。日本再建のために戦死者を思い起こさせる言説から、戦うために戦死者を賞揚した戦時中と、戦死者を利用するという点では連続した意識がみられる。戦時中の犠牲的行動を貴いものとして評価しつづけることは、兵士や村民へ犠牲的行動を求めた銃後時代の通信報国団の行為を肯定することにもなっただろう⁽⁸⁶⁾。

『かもめの便り』が戦後も『はと』として発行を続けられたことから、共助会の月刊紙活動は、村内メディアとして居場所を得たことが見い出せる。さらに時代を下って、2000年の初山別村創基100年・村制施行90年の記念事業として『かもめの便り』の全号復刻が選ばれたことから、初山別通信報国団の活動によって、村の集合的記憶となるアーカイブズが作成されたとも捉えられるだろう。これもひとえに、初山別通信報国団による戦時中の銃後後援活動を、地域が忘れていなかったことの証左と考えられる。

通信報国団分団については、資料があまりにも少なすぎる。断片的な資料を集め繋ぎ合わせて考察していくことで、事例研究を少しずつでも増やしていく必要があるだろう。

(ばいとう ゆみこ 京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学)

84 佐口和郎「産業報国会の歴史的位罫—総力戦体制と日本の労使関係—」山之内靖、ヴィクター・コシュマン、成田龍一編『総力戦と現代化』柏書房、1995年。

85 初山別局『はと』第1～2、4～13、13、15～18号、昭和21年7月～昭和23年1月、竹内家所蔵。3号は欠、13号が2つあり、14号はない（14号を誤って13号と表記したと思われる。）。『はと』発行の経緯は梅藤、前掲論文、119頁を参照。

86 梅藤、前掲論文、118～123頁。